# 茨城県沼田町方言のイントネーションに関する記述音声学的研究

若狭あゆみ†

キーワード： 茨城方言、イントネーション、記述音声学、平叙文と疑問文、実験音声学

## 1 はじめに

アクセントと異なり、イントネーションは一般にどの言語においても文末の位置で上昇すれば疑問であり、下降すれば命令や感嘆文になるものと思われがちである。しかしながら、近年、イントネーションの研究が進展してきたおかげで、イントネーションにも言語ごとの差異があり、さらに方言差も大きいことが明らかにされつつある[1]。

ところで、日本語の茨城方言は、語尾上がりの性質をもつとされている。語尾上がりは、一般的に東京方言をはじめとする多くの方言では、疑問の発話の中に見られる特徴であると考えられる。このことを併せて考えた際に、茨城方言の話者が平叙と疑問とを区別するのに障害はないのかと考えたことが、本研究の出発点である。

## 2 目的

本研究の目的は、一般的に語尾上がりとされる茨城方言に関して、平叙と疑問の発話をどのように区別しているのかを記述音声学的方法によっ

†筑波大学人文学類生

[1]井上史雄 (1980) など

て探ることである。ただし、記述の裏づけとして音響音声学的方法を併用している。

## 3 方法

### 3.1 被験者

本実験の被験者は茨城県つくば市沼田に住む女性6名と男性1名である。それぞれの被験者に関するフェイス・シートは次のとおりである。

| 被験者名 | (イニシャル) | 年齢 | 性別 |
|---|---|---|---|
| 1 | A.M | 77 | 女 |
| 2 | A.F | 78 | 女 |
| 3 | T.T | 80 | 女 |
| 4 | T.K | 90 | 女 |
| 5 | S.S | 91 | 女 |
| 6 | S.M | 不詳 | 女 |
| 7 | M.H | 不詳 | 男 |

### 3.2 実験器材

本研究では、記述を行う際にディジタル VTR にて同録を撮り、音声と映像を解析することによって記述の信頼性を向上させるよう努めた。収録に用いた器材は、SONY ハンディカム DCR-PC7、解析には SONY の PCG-7X2N、OS は Windows Vista Home Basic である。

### 3.3 場所と周辺情報

本実験の取込みは、茨城県つくば市沼田町にある被験者の家で、ひと部屋に被験者が輪になって座った状態で行った。周辺は田畑や木に囲まれており、天候もよく、静かな状態であった。

### 3.4 実験の手順

本実験は2008年3月13日に行ったものである。被験者の方にご協力をいただき、全員に輪になって座った状態で1時間ほど、自由に歓談してもらった。そのとき、録音を取ることは全員に承知していただいたが、会話の内容に関してこちらから指示を出すことはしなかった。その理由は、できるだけ自然な状態に近いイントネーションを収録したかったからにほかならない。

人の心理の常として、器材を持ち込まれたり、調査であるという改まった状況の中に置かれたりすると、緊張して、いわゆる「よそゆき」の会話になりがちである。そのような不自然さを少しでも軽減させるため、このような方法を試みた。

### 3.5 解析方法

録音された音声データを、音響編集ソフトCool Edit 2000で発話ごとに分けたのち、音響解析ソフト杉スピーチアナライザーでピッチ曲線を描きだした。なお、サンプリングレートは44.1KHz、量子化16ビットのモノーラルである。

# 4 結果

## 4.1 文末モダリティ「な？」がつく疑問

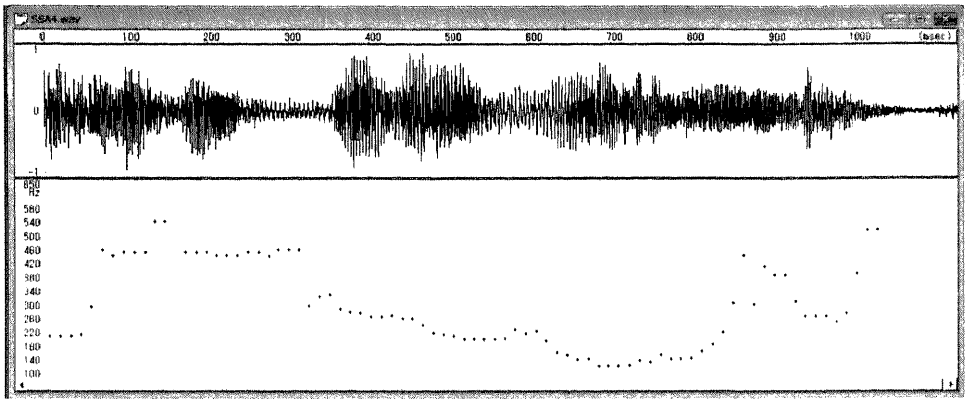


図 1：「～っぺかんな」

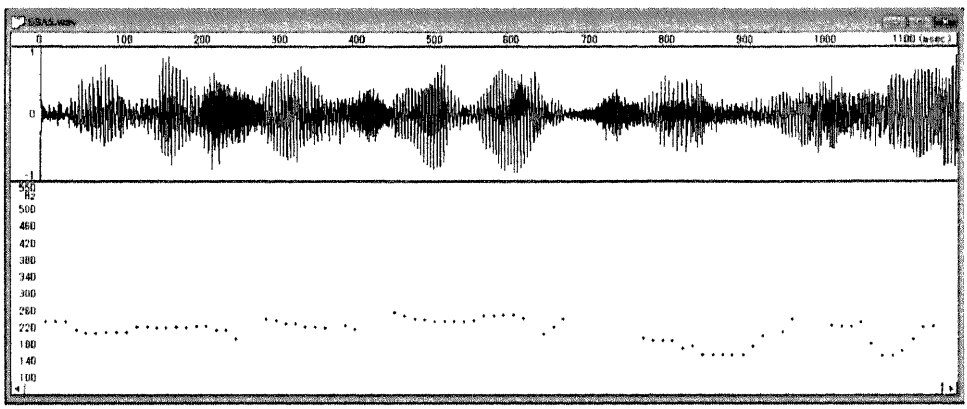


図 2：「今年はそうだっつったよな」

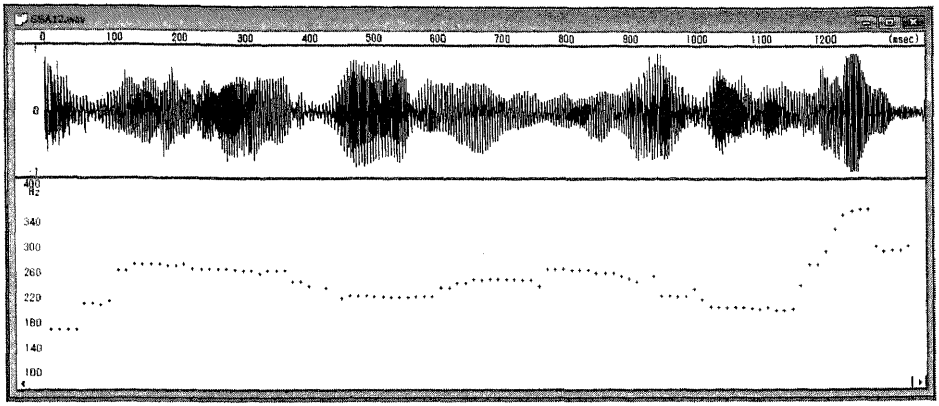


図3：「一年中伸びねえかんな」

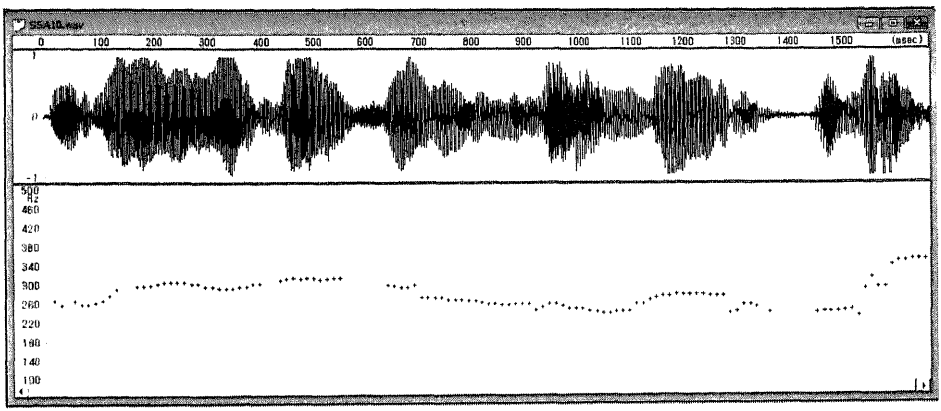


図4：「～な」

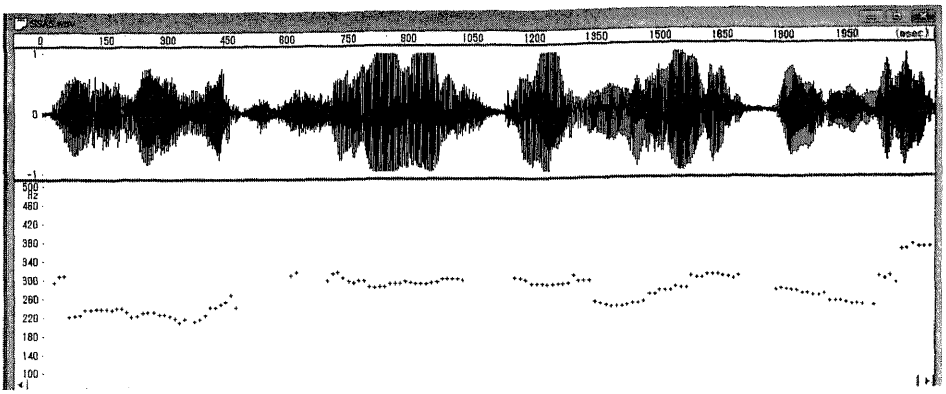


図 5：「夜、お月様の光でもあるんだっぺなあれな」

## 4.2 文末モダリティ「な？」がつかない疑問

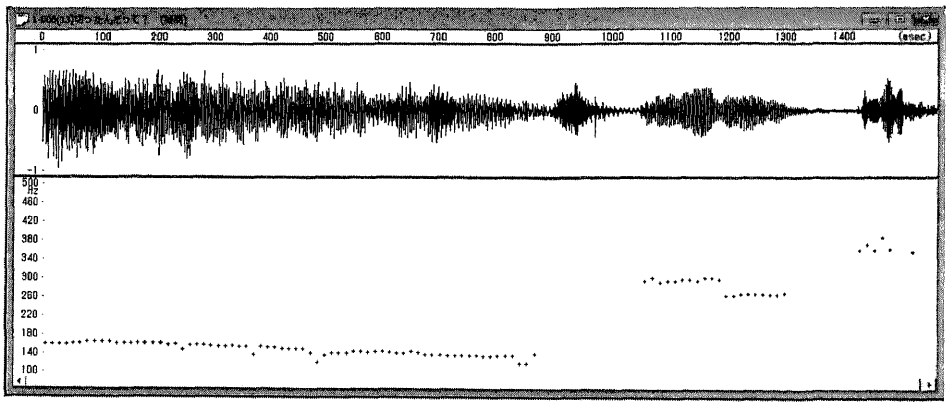


図 6：「切ったんだって」

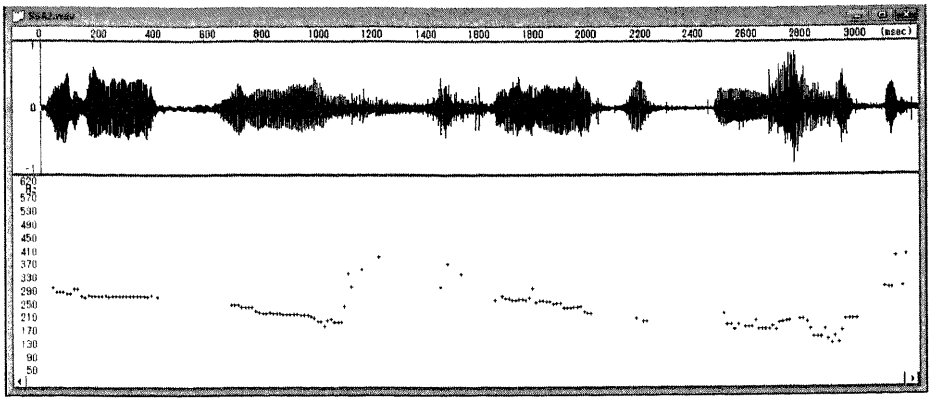


図 7：「たまごっちあったっぺ」

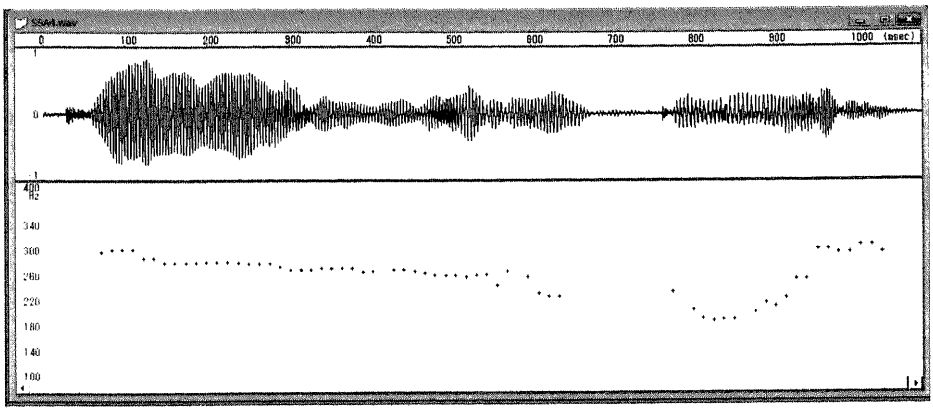


図 8：「くにまつまで行ったの」

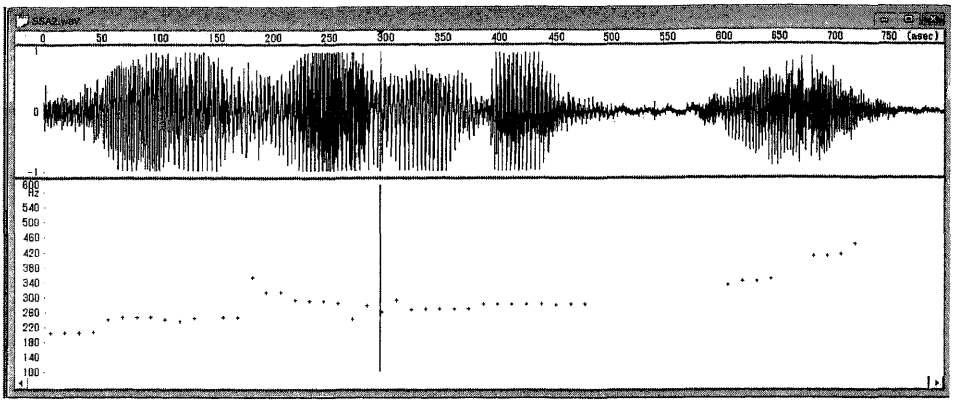


図 9：「おいはぎだっぺ」

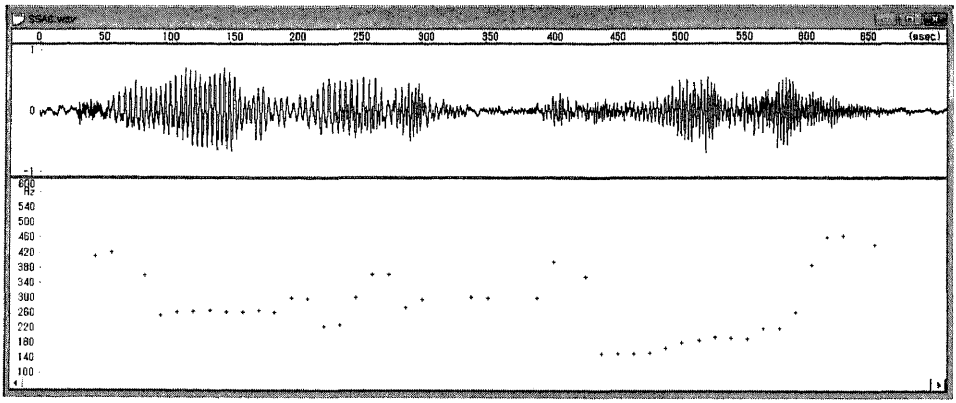


図 10：「ケーブルカーね」

### 4.3 疑問でない発話

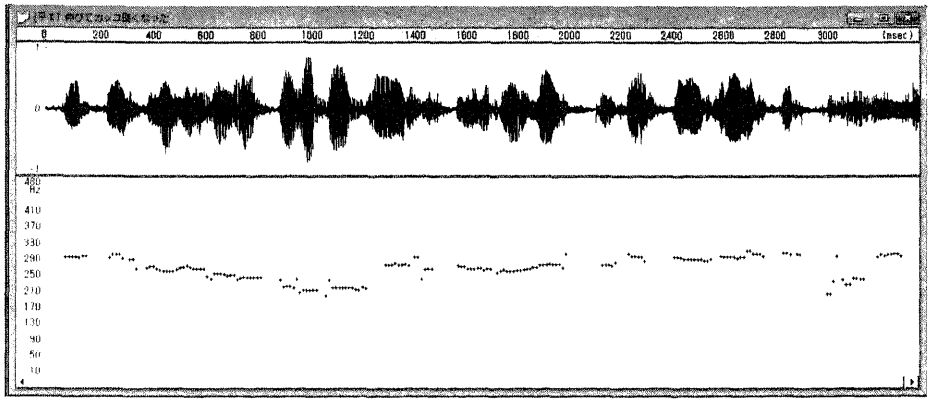


図 11 :「切った年は酷かったけどだいぶ伸びて
かっこよくなったっぺなあれな」

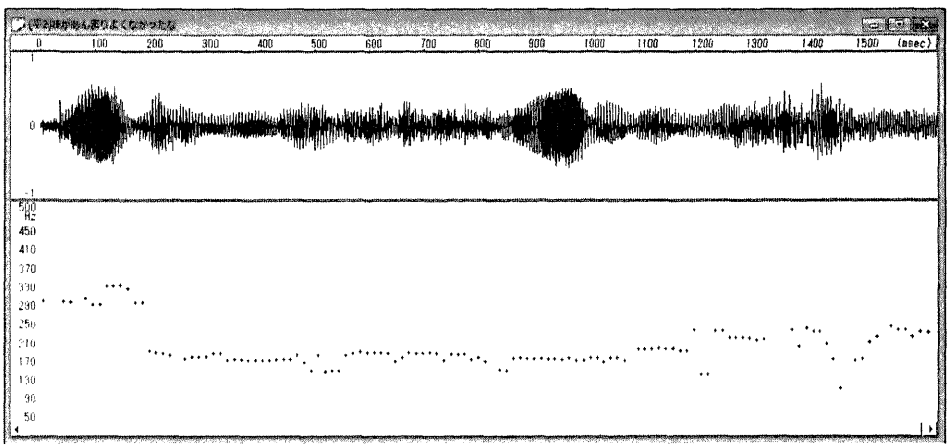


図 12 :「枝があんまり良くなかったな」

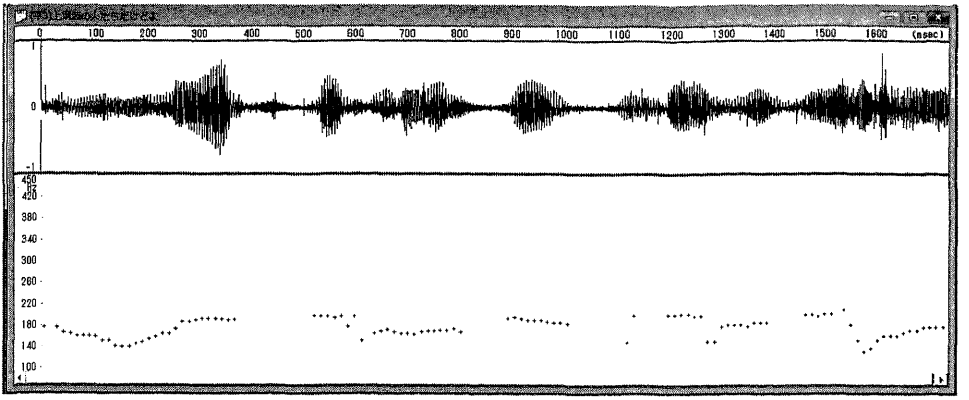


図 13：上筑波の人たちだけどよ」

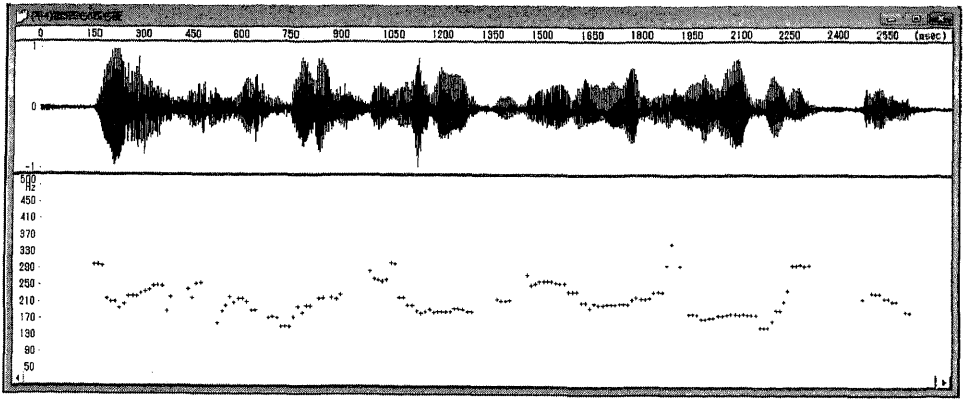


図 14：「猪 5 匹も 6 匹も夜毎晩来てら」

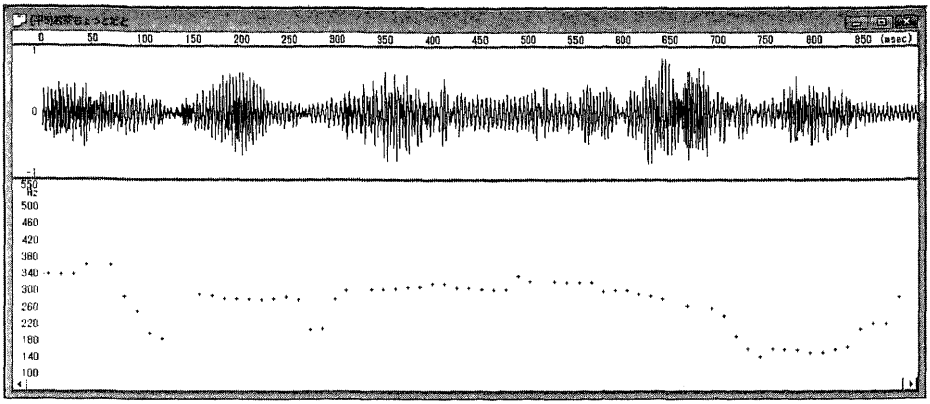


図 15：「お茶ちょっとだと」

## 5 考察

まず、4.1 の結果から、文末モダリティの「な？」がつく疑問では、比較的安定したピッチ曲線をもつ。また、文末の上昇の幅が小さいことが注目すべき点である。

次に、4.2 の結果から、文末モダリティの「な？」がつかない疑問では、一つの発話の中でピッチにばらつきが見られる。また、文末の上昇の程度が 4.1 に比べて大きい。さらに、総じて比較的高いピッチをもつのではないかと見られるところなどが注目すべき点である。

最後に、4.3 の結果から疑問でない発話の特徴として、聞いたときの印象では上昇しているように聞こえるものの、物理量としてのピッチ曲線を見る限り、文末はそれほど上昇していないことがわかる。

以上のことから考えられることは、次の 4 点である。

(1)疑問のイントネーションは、大別すると文末モダリティ「な？」がつくものと、つかないものとに分けられる。

(2)文末モダリティ「な？」を有する疑問は、モダリティに依存するため、ピッチの変化幅が小さい。

(3)文末モダリティ「な？」をもたない疑問は、ピッチに変化幅をもたせる傾向にある。

(4)疑問でない発話の文末が上昇しているような聴覚印象を与える要因は、文末位置に特化したピッチの上昇ではなく、文頭・文中などあらゆる位置における prosodic pattern によってもたらされるという可能性があるのではないか。

これらのうちで、(2) と (3) に関しては文法論と音声学とのインターフェイスを考える上で、興味深い事実であろう。すなわち、「な？」という形態によって文法的な表出を優先させれば、音声情報としての上昇調イントネーションは余剰的となるので選択されない。その逆に、音声情報として文末上昇イントネーションを選択した場合には、「な？」という形態を余剰な情報として棄却するのである。

(4) に関しては、自己の用いる prosodic pattern とは異なる音形に接した際に感じられる心理的要因というものも、言語音の認知にかかわる側面からは重要な意味を持つものと思われる。しかしながら、現状では言語研究の大半が「発話者の視点」に立っており、「聴取者の視点」をほとんど顧みない傾向がある。したがって、今後は後者の視点に立った研究姿勢が注目されてゆかなければならないものと考える。

## 6 展望

以上の研究をとおして、なによりもまず、今後はより多くのデータを集めることで、ここに指摘した事実の再現性を高めたい。また、考察の (4) に述べたように、疑問でないイントネーションにおける「上昇」と認知される要因を探ることと、そのために予測される「聴取者の視点」に立った研究方法とはなにか？ について考察をしてゆきたいと考える。

【参考文献】

井上史雄 (1980)「方言のイメージ」『言語生活』341：48-56.筑摩書房

佐藤奏 (2008)「宮城県登米市石越町方言のアクセント:「南奥特殊アクセント」の分析」『日本語学論集』4：143-154.東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室